

## 組織的な若手研究者等海外派遣プログラム報告書

氏名：渡辺 一生	提出日：平成 24年 5月 31日
<b>東南アジア研究所における職名：機関研究員</b> *右記の該当する職位に○をつけて下さい。(講師・助教・助手・ <u>ポスドク</u> ・博士課程学生・修士課程学生・学部学生)	
<b>派遣先の研究機関等(調査を実施した国名・機関名(日本語で記載)及びカウンターパート名)：</b> オーストラリア クイーンズランド大学 農業・食料科学研究科 シュー・フカイ 教授 アメリカ 連邦政府 東西研究所 ジェファーソン・フォックス 教授 ドイツ ホッヘンハイム大学 熱帯・亜熱帯農業研究センター ジョージ・カディッシュ 教授 *派遣先の研究機関等の種類について右記の該当する箇所に○をつけてください。 <u>大学</u> <u>研究機関</u> ・企業・その他	
<b>派遣先の研究機関等での職名：</b> Visiting Researcher(クイーンズランド大学)、Visiting Scholar(東西研究所)、Visiting Scientist(ホッヘンハイム大学)	
<b>派遣期間：</b> 平成24年2月4日～平成24年2月26日、平成24年3月1日～平成24年4月27日 (派遣日数：81日)	
<b>研究活動等の主な内容(該当する番号に○をつけてください。複数可)</b> <u>①研究・実験</u> ②フィールドワーク <u>③セミナー</u> ④インターンシップ ⑤サマースクール等の講習 <u>⑥学会出席</u> ⑦単位取得等 ⑧その他	
<b>研究活動の主な領域(該当する番号に1つ○をつけて下さい。)</b> ①人文学 ②社会科学 ③数物系科学 ④化学 ⑤工学 ⑥生物学 ⑦農学 ⑧医歯薬学 ⑨総合領域 <u>⑩複合新領域</u>	
<b>派遣の概要(500～700字程度)</b> 本派遣では、オーストラリアのクイーンズランド大学、農業・食料科学研究科、アメリカ連邦政府の東西研究所、ドイツのホッヘンハイム大学、熱帯・亜熱帯農業研究センターなど、農学や地域研究において先進的な研究を行っている機関を架橋し、自らの研究テーマの発展や研究ネットワークの構築を試みた。クイーンズランド大学では、カンボジアの天水田における米生産量や水田圃場の水文環境をシミュレートするプログラムの精度評価を、シュー・フカイ教授およびジャクイ・ミッチェル教授と共に実施した。アメリカの東西研究所では、“The Development Path of a Rain-fed Paddy Village Based on Subsistence Rice Production: A case study in Northeast Thailand”という題目で研究発表とディスカッションを行った。また、同センターの地理情報学の専門家やポスドク研究者および留学生らと、衛星画像による土地利用解析手法について情報交換を行った。ドイツのホッヘンハイム大学では、熱帯亜熱帯農業研究センター主催の国際シンポジウム“Sustainable Land Use and Rural Development in Mountain Areas”に参加し、タイ北部における異分野融合型研究や山岳地域の持続可能な開発のあり方などについて情報交換やディスカッションを行った。加えて、当研究所の授業の一環であるFaculty Seminarで“Spontaneous Agricultural Development Based on Subsistence Rice Production-A Case Study in Northeast Thailand”という題目で博士課程の学生やポスドク研究者に対してプレゼンテーションとディスカッションも実施した。	
<b>事業に係る研究成果(500～700字程度)</b> 本事業によって、「研究テーマの深化」と「研究者ネットワーク拡大」の二つの成果を得ることができた。東南アジア出身の留学生や研究者が多数在籍している複数の研究所において研究発表の機会が得られたことで、多様な研究者との意見交流ができた。互いの意見の相違や一致点について深い議論ができたことは、自らの研究テーマについての新たな視点の発見やオリジナリティの構築に大変役立った。特に、これまで蓄積してきた調査情報とその分析が、研究対象地域の実態の解明にとどまらず地域を越えた普遍的な議論にも適用できる可能性があることを発見できたことは、本事業における大きな成果である。 また、異分野融合を非常に重視する地域研究にとって、専門を異にする研究者間のネットワークの構築は大変重要な課題である。したがって、ホッヘンハイム大学で開催された異分野融合をテーマとした国際シンポジウムへの参加は、全く異なる分野や対象地域を研究している研究者との国際的なネットワークを構築する上で大変有意義であった。特に、今回のシンポジウムは若手の研究者の割合が多く、今後とも互いのネットワークを維持することで新たな国際共同研究を展開できる可能性を開くことができた。	